

「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果について

2009年5月21日

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
文化庁

2009年5月19日～21日に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所及び文化庁の主催の下に、奈良文化財研究所において「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」が開催された。この研究会では、中国、韓国を代表する2名の研究者をはじめ、日本国内から6名の研究者・専門家を中心として、標記の主題に基づく研究成果の交流及び議論が行われた。

この研究会における目的、論点、結論については、以下に示すとおりである。

1. 目的

- (1) 日本において8世紀から14世紀にかけて造営された「仏国土(淨土)を表現する庭園」(以下、「淨土庭園」という。) (Pure Land Garden)の本質を明らかにし、価値の証明を行うこと。
- (2) 淨土庭園の系譜を明らかにするために、以下の3点について明らかにすること。
 - ① 中国・韓国・日本の各地域において形成された理想郷の思想
 - ② それらが庭園の理念、意匠・技術に与えた影響
 - ③ それらの庭園における表現上の類似点・相違点
- (3) 淨土庭園の最も重要な到達点を示す一群の事例が現在もなお継承されている平泉(日本の世界遺産暫定一覧表に記載された資産)の顕著な普遍的価値を明確化すること。

2. 論点

(1) 人と自然との関わり——芸術的表現としての庭園

人と自然との関係を芸術にまで昇華させた東アジアの庭園の成立・発展の系譜・特質に関する検討を通じて、以下の3つの観点から議論を行った。

- 論点1 庭園文化の基層を成す人と自然との関わり
- 論点2 庭園文化の伝播と発展
- 論点3 東アジアにおける庭園の表現

(2) 庭園における池——その意味と変遷

(1)の議論を踏まえ、日本において成立した淨土庭園の系譜・特質について、東アジアにおける理想郷の表現、あるいは庭園と池との関係に関する検討を通じて、以下の3つの観点から議論を行った。

- 論点1 庭園における池
- 論点2 淨土変相図などの淨土を描いた図像における「宝池」
- 論点3 日本の淨土庭園における池と堂舎

(3) 理想郷と庭園——東アジアにおける表現の本質と多様性

(1)、(2)での議論を踏まえ、東アジアにおける理想郷と庭園との関係を包括的に検討し、平泉に

残された一群の浄土庭園が持つ顕著な普遍的価値を明らかにするために、以下の 3つの観点から議論を行った。

論点1 東アジアにおける理想郷の表現としての庭園

論点2 日本の浄土庭園の独自性

論点3 東アジアの庭園文化史上における平泉の一群の浄土庭園の代表性

3. 結論

中国・韓国・日本の3つの国には、東アジア地域に独特の自然と人間との関係を表す庭園文化が育まれ、それらを反映して形成された多くの歴史的庭園が現存する。

各国・各地域の庭園には、作庭の理念、意匠・技術の各側面において、共通する性質が認められる一方で、各々の歴史的・文化的背景に基づく固有の性質も認められる。

その中でも最大の共通点は、庭園が仏教・神仙思想、陰陽五行説などの様々な思想・理念に基づき、自然を敬慕し、自然に馴染み、自然の姿を写し取ることを目的に、現世における理想郷を表すものとして創造されたことである。

庭園は、中国から朝鮮半島及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、各々の地域に固有の自然観とも融合しつつ、独自の発展過程を経て各国に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。

特に日本の場合には、中国から朝鮮半島及び日本へと伝わった作庭思想が、日本に固有の自然崇拜の信仰形態・自然観とも融合しつつ、中国・朝鮮半島とは異なる独自の庭園文化と、それを表す庭園が形成された。

その中でも特筆すべきは、仏の浄土世界を理想郷と見なし、それを具現する独特の浄土庭園(Pure Land Garden)の様式が含まれていることである。それらが持つ顕著な普遍的価値を正当に評価するためには、以下の点について十分考慮することが必要である。

ア. 本研究会は、浄土庭園を以下のように定義した。

浄土庭園は、阿弥陀仏の極楽浄土をはじめ、十方世界において仏道に励む諸仏の仏国土(浄土)を理想世界(楽土)として捉え、それを現世の寺院境内に空間的に再現した芸術作品である。それは、周囲の自然環境とも緊密な関係を保ちつつ、本尊が安置された仏堂と一体となって、本尊の浄土を莊嚴するために仏堂の前面に設けられた庭園である。さらに、それは数々の浄土変相図に描く「宝池」を象徴して造られた広大な水面の池を主たる構成要素とし、島伝いに人間を浄土へと導く橋などが架けられる場合などもある。

これらの日本の浄土庭園の地割・構成要素・細部意匠は、浄土庭園が盛行する11世紀に完成の域に達していた寝殿造住宅の庭園に倣って定められたが、法会などに際しては仏国土(浄土)を象徴する臨時的な装飾も行われた。

イ. 中国では、現時点において、阿弥陀仏の極楽浄土の世界を象徴して、敦煌莫高窟の壁画に描かれた宝樓殿舎及び宝池を実体化したような庭園の現存事例又はその考古学的遺跡が確認されていない状況にある。

また、韓国では、慶州の仏国寺において発見された九品蓮池が浄土庭園の考古学的遺跡の数少な

い事例として確認されてはいるが、日本のように浄土庭園が盛行した形跡は認められない。

これに対し、日本においては、中国及び朝鮮半島から、人と自然との関わりにより創造された庭園の理念、意匠・技術が仏教・神仙思想・陰陽五行説とともに伝来し、8世紀から14世紀にかけて、日本に固有の自然崇拜の信仰形態、山中を他界（死後世界）と見なす自然観とも融合・発展する過程で、世界の他地域に類例を見ない多様な浄土庭園の様式が確立し、多くの事例及びその考古学的遺跡が残された。それらの庭園の池は、浄土変相図に描く幾何学的形態を持つ宝池とは異なり、洲浜など曲線を描く護岸の意匠に基づく点で特質を持つ。

ウ. 平等院庭園を含む数々の浄土庭園の中でも、平泉の一群の浄土庭園は、イにおいて述べた日本庭園の発展過程における最も典型的・代表的な浄土庭園の事例であり、11世紀の寝殿造住宅庭園の作庭技術書として有名な『作庭記』の記載事項を正確に具現している点においても、他に類例を見ない傑出した資産であることから、以下の3点に基づき、顕著な普遍的価値を持つ可能性が極めて高い。

- a. 仏国土（浄土）を象徴的に表現した仏堂・庭園群とそれらの考古学的遺跡は、6世紀に中国及び朝鮮半島から伝えられ、12世紀にかけて日本列島の最東端へと進んだ建築・庭園の意匠・設計に関する人類の価値観の重要な交流の到達点を示している。
- b. 仏国土（浄土）を象徴的に再現しようとした優秀な芸術作品であり、それらの考古学的遺跡をも含め、建築・庭園の分野における人類の歴史の重要な段階を示す傑出した類型である。
- c. 平泉において一群の浄土庭園が完成する上で重要な意義を持ったのは、複合的性質を持つ日本独特の仏教思想である。それは、世界的な思想体系である仏教思想が、6世紀に日本に伝わり、その後、12世紀に日本列島の最東端へと到達する過程で、法華経・密教・浄土教のみならず、日本古来の神道を含む自然崇拜思想とも融合し、地上に現存するものも、地下に遺存する考古学的遺跡をも含め、仏国土（浄土）を体现した庭園群の意匠・形態へと直接的に反映した点において、顕著な普遍的意義を持つ。

4. 主な参加者

呂 舟（清華大學教授／中華人民共和国）

洪 光杓（東國大學校教授／大韓民国）

田中哲雄（議長：前・東北芸術工科大学教授）

田中 淡（副議長：京都大学人文科学研究所教授）

本中 真（文化庁記念物課主任文化財調査官）

尼崎博正（京都造形芸術大学教授）

仲 隆裕（京都造形芸術大学教授）

小野健吉（奈良文化財研究所文化遺産部長）

杉本 宏（宇治市歴史まちづくり推進課主幹）

佐藤嘉広（岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査）